「キャプテンは監督よりも上、そのキャプテンより」

三芳東中学に赴任して、最初に決まったのはソフトボール部の顧問であった。英雄兄に報告すると「部活では顧問よりキャプテンの方が上だからな。キャプテンと意見が対立したら、キャプテンに譲れ」と言われた。日大職員時代、教職員チームで兄とバッテリーを組んで、物理学を応用してそれなりの理論・成果を自負していたので「ムッ」としたが、僅か2年で思い知らされた。

本当は野球部顧問に成りたかった私、同じ球技ならと引き受けたソフト部。何やら周囲の雰囲気がおかしい。と言うのも、若くてカリスマ性のある顧問の元、昨年全国大会準優勝のチームだった。旧顧問は同じ入間郡の若葉中で再任。3 年生たちは全くと言ってよい程私の話を聞かない。ソフトボール以外でも問題児の集団だった。

当時高校ソフトボールで全国に君臨していた星野女子高校の星野明先生に指導を仰ぎ、物理学的考察を加えて、指導するほど、旧顧問と番うと反発され、結局、夏に向けての本選に敗退した。がっかりしている私に、2年生たちが集まり

「先生の理論は正しいのですよね。私達は、先輩たちのお陰で、いつもソフト部は白い目で見られ悔しい思いをしていました。先生の指導の通り、何でもやりますから見捨てないでください。」と言ってきたのだ。

キャプテンの髙橋はじめ投手のヤンミこと山本美咲子、最も足の速い佐々木など、真剣な表情で迫られた。心新たに頑張ろうと決意した。

ソフトボールは名前は「軟らかい」が、その分重いボールで、常に怪我と故障との戦いだ。

技術を教える前に、ウォーミングアップ・クールダウンの重要性、運動に入る前に柔軟体操。前に投げるのではなく、上に弾くキャッチボールだけは、ガンとして譲らず励行した。技術にはやる生徒たちには不満だが、T バッティングを守備付きで行う「T ノック」を開発したり、ソフトで重要なゴロを拾いながらの送球を4人1組のローテーションにしたりして、基礎練習で実践練習を補う工夫をした。更に、ソフトボールの試合の1時間ほどを全力で動き回る基礎体力として、校地一周 500m を 25 分以下で走る事を課したが、31 人全員克服した。ソフトボールではセンターラインと言って、投手・2塁手・遊撃手・中堅手が大事なのだが、投手の指導は全くできないので、専ら星野女子高に頼ったが、何度訪問しても嫌がらず親切に教えてくれた。その代わり、自分が以前から考えていた「守備の原理」＝「人はチャレンジすればエラーは当然」なので、打者1球ごとに、全員が動く守備を教えた。ボールに向かって突っ込むもの、エラーに備えて背後に回るもの、送球される塁に入るもの、その送球のバックアップ。更にエラーした時、次の塁を守るものと、役割を決めると、打者が打つたびに、全員がどこかに移動する。特に我がチームは、全校一足の速いセンターがいるので、フライは全てセンターが取る。セカンドやショートが 2m 下がって取るよりも、センターが 20m 走って取った方が早いという守備。であれば、外野に抜けるヒット性のグラウンダーも、ライトが前進し、捕球した速度のまま1塁に送球する「ライトゴロ」と言う、ソフト特有のﾌﾟﾚｲが得意であった。また、攻撃においては、60m と言うエリアではホームランも容易に狙えるが、それよりも、アウトに成らない選手が 9 人いれば、無限に得点できるという理論を納得してくれて、ホームランを打てる筋力を付け乍ら、一人一人が、パンチ力でゴロを打てるように、「バスターヒッティング」を身に付けさせた。特に、ソフトボールでは塁間が 18.29m と、野球の3分の2なので、我がチームの様に足の速い選手に対しては、盗塁を警戒して、ベースに近い守備をする。走者1・3塁の形を作ると、1塁手3塁手はバントに備えて、ベース前ライン寄りに守備位置を取るので、サインによって、セカンドかショートが2塁に入る体制を取る。と言う事は、バスターでバントの構えをすると、90°のダイアモンドの中で、実際に強打に参加できるのは、セカンドかショート一人になる。バットを引く瞬間に、どちらが動くか判断し、いない方に転がせばヒットになり、3塁ランナーが得点すると言う原理だ。1塁ランナーは必ず3塁を奪い、バッターは1塁で止まり、再び1・3塁を作る。1塁ランナーが必ず3塁に行けるのは、1・2塁間を抜けた時は、ライトから3塁の送球なので、暴投を怖れて投げないので、当然行けるが、2・3塁間を抜けた時はレフトからの送球なので危ないと思うだろうが、サードは対バントで前進、ショートは打球処理で右に動くので、3塁はがら空きなのだ。だから、一度1・3塁を作れば、よほどファインプレーをされない限り高得点が期待できる。

事実、秋の新人戦に備えたその夏の練習試合では、全て 30 点以上得点し、2点以上取られない無敵の進撃ぶりであった。

取られる得点が2点に抑えられたのは、1年生で正捕手に抜擢した山本夏子と、投手のヤンミの努力に負うところが大きい。当時も今も、ソフトボールと言えばウィンドミルと言って、腕を右モモにぶつけて、手首の返しで最速のボールを投げる上野投手の投法が主流であった。しかし、体格が小柄で指の短いヤンミには限界が有ると感じたので、あえてマイナーだったスリングショットを勉強して教えた。ボールを持つ右手、グラブの左手、左足を、同時に前方に蹴りだし、グラブとボールの位置を交換する力で投げる方法で、本来、蹴りだした瞬間に方向が決まる。ヤンミは賢い子だったので、敢えて速度を捨てて、蹴りだす力でボールを投げるのではなく、空中に放り出した両手と足が、落ちる寸前まで、相手をよく見て、内角外角どちらに始動しているかを見極め、逆の方向にボールを置きに行く投法を学ばせた。ぎりぎりまで重心を浮かせる考え方はスキーのウェーデルンの手法だが、ヤンミは理解し、本当にぎりぎりまで耐えた。一方捕手の山本は、私の教えで、バッタの構えを見て、狙っているコースをつかみ取るのだが、迷った時は私を見るので、サインでコースを教え、見事に応えた。決して早くないボールにあれよあれよと押さえられる相手チームは驚いたに違いない。そして、攻撃されれば得点の山であった。

ここに、心の隙が出来た。

新人戦では、こちらのサインが見破られ先制点を許してしまった。焦って攻撃するので、ボールを見極め塁に出る攻撃を封じられ、1・3塁が作れず、逆転できなかった。

翌春の選抜大会では、投球速度も上がり満を持して臨んだ。5回までで11対0で勝っていたのに、試合成立直前に雨が降り出した。それまで、女性の部活なので、雨天強行と言う事は無かったので「ロージン」を用意していなかった事はうかつであった。

指の短いヤンミではボールを包むように握れないので、全力で投げたボールは前に飛ばずに、地面に突き刺さる。「守備を信じて置きに行け」と指示を出しても、最後の大会で降板する訳に行かないと、ポケットのタオルで拭きながら投げた。ついに同点に追いつかれても、いずれ逆転すると、投げさせた。実際は、濡れて滑るだけでなく、これほど連続して投げた事が無いので、握力が無くなっていたのだ。投手交代を告げようと立ち上がると、キャプテンの髙橋がタイムを取り、全員がベンチに帰って来た。センターの佐々木が言う。「先生、投手交代は止めてください。ここまでヤンミがどれほどの努力をして来たか先生は知らないのです。私達はみんな納得しています。最後まで投げさせてください」と。その結果、31対13で、我々の夏の大会は終わった。

監督は技術や理論は教えられても、本当の努力を知っているのは、仲間たちだけだと言う事を思い知らされたのである。

何も言わないのに、私が立ち上がっただけで、タイムを取ったキャプテン。みんなの気持ちを代弁したセンター。最後まで投げぬいたエース。勝敗を越えたものがスポーツには有るのです。

この子達と、グラウンドに汗して本当に良かった。